
記憶 —あの木の下で—

三月 亜莉棲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶 ―あの木の下で―

【Nコード】

N3256X

【作者名】

三月 亜莉棲

【あらすじ】

はじめましてです♪ 華逗葉です^^

今回初めて小説書くので何かと心配です・・・（汗）
助けてくれるとありがたいんですが・・・お願いします（えっ

今回は新蘭です。途中で平和や快青など・・・

ってか多分最終的には大体のカップルが
成立すると思います

笑

まあ暖かく見守っててください(えっ

(これはパラレルストーリーです)

1 挨拶（前書き）

この小説はパラレルストーリーです。

c p は新蘭おもですが途中平和、快青などでてきます♪

登場人物 - - -

工藤 新一 （探偵）

毛利 蘭 （歌手、女優）

宮野 志保 （科学者）

鈴木 園子 （令嬢、蘭のマネージャー&親友）

服部 平次 （探偵）

遠山 和葉 （女優）

黒羽 快斗 （マジシャン）

中森 青子 （快斗の助手）

松葉木 美緒 （和葉マネージャー）

です。

ご挨拶

「犯人は あなたですね・・・」

今日も名探偵工藤新一は華麗に事件を暴いてゆく。

そしてそのとき、工藤は急いでいたのだ。

米花中央ビル

「遅れました。佐藤刑事、それで俺に頼みたい事ってなんですか？」

「工藤君、そうでもないわ。十分早かったわよ。それで頼みたい事」

「言うのはこの子のことなの。」

「は・はじめまして・・・」

工藤の前には、陶器のように白い肌を持った美しい美少女だった。
「はじめまして、工藤新一です。それで、佐藤刑事俺に何をしろと？」

「じつわね、この子女優と歌手をしてる今大人気の女の子なの。」

「はぁそれで、俺にこの子の護衛を頼みたいと？」

「そうなの・・・お願いできる？この子はいらないうって言うてるだけ ど・・・この子のお母さんに頼まれてしまって・・・」

「彼女の名前は？」

「も・毛利 蘭です。女優と歌手の時は『蘭』って名前にしてます。」

「へえ・・・いいですよ^^楽しそうですし^^」

「ありがとう!!工藤君。じゃぁ今日からお願い出来る？」

「はい。」

「じゃぁよろしくね」

「挨拶（後書き）」

我ながら・・・文へたくそですねえ、
長いですし・・・

ご指摘お願いします♪

幼馴染（前書き）

小説、やっぱりむずかしいですね・・・

頑張っ て書いていくので応援おねがいします！！（えっ

1話で警部と刑事まちがえました・・・了承ください

幼馴染

「あの・・・これからどうするんですか？」

「とりあえず毛利さんのところに行って服とかいるものにとってこないと・・・」

「それならさっき佐藤刑事が・・・」

「じゃあどうしたい？俺は仕事入ってないから暇だけど」

「じゃあ友人のところについていいですか？」

「いいけど？誰の家に行くの？」

「鈴木園子っていう・・・鈴木財閥の・・・」

「ああ園子か！なら俺の家知ってるじゃん」

「園子と知り合いだったんですか！！」

ここからどんどん二人のはなしに花が咲いてゆく・・・

そしてお互いの事を新一は蘭と蘭は新一と呼べるようになった。

ピンポン

「はい！あらっ？蘭♪それと何で一緒に新一君と一緒にいるの？まあいいわ入って！！」

二人は園子宅に入ってしまった。

園子宅 リビング

「へえ蘭のボディガードねえ」

「お母さんが無理言ってたのんじやってさー（汗）」

「いいんじゃない？蘭最近忙しいからねたまれる確立高いし・・・
まあ蘭ならだいじょぶかな？」

「園子それどういうことだ？」

「新一君聞いてないの？蘭は、空手の都大会チャンピオンよ。
「すげーっ！！」」

「園子！！恥ずかしいじゃない・・・」

「いいんじゃないか？俺の友達の彼女も合気道やってるし。」

「へえ！あつてみたい！！」

「じゃあ今度行ってみつか！！」

「いいなああたし、最近お父さんの手伝い忙しいのよ・・・行き
たかったなあ」

「今度行けばいいじゃないか」

「そうねっ！あきらめるわ」

こんな感じで話の途中をいれてくれそうな余裕なく会話は終わって蘭は新一の家にとまることになった。

幼馴染（後書き）

華「なんかあんたたち書くのむずかしい．．でも楽しいかも！！」

新「じゃあ今度平和とか快青とかのだけっていうやつ作ってみれば？」

蘭「いいね♪でもあたしたちもいれてね？」

華「うん！もちろん！！今度は大学生のみんなをかいてみようかなあ」

新「おっ！おもしろそーじゃん！！」

蘭「でたい！！」

華「そんなに人気があるんだったら書こうかな！」

新「よっしゃー！！」

蘭「やったー！！」

華「じゃあいつもの決めゼリフ！！」

新蘭華「真実はいつもひとつ！！」

新一宅ゝなんで？（前書き）

今回は平次と和葉がでてくるですよ♪

新一宅くなんで？」

ガチャッ

「ココが俺の家だ。」

「ひ・広い・・・」

そう、工藤宅はとてつもなく広い。ただっ広く広い。

「そういえば、なんでこの靴・・・まさか!!」

新一は家の中に走っていった。

「ちよっ、新一!？」

蘭がかけていくと・・・そこには、

「おお!工藤!!お前なんで超!美人連れてきてんねん!!」

西の探偵、服部平次と・・・

「ああ!!蘭ちゃん!!ひさしぶりい!!1ヶ月ぶりやなあ!!」

女優、遠山和葉がソファに座っていた。

「服部・・・なんで来てんだよ!!ってかアポなしで来んなって
いつてんだろ!!」

「ええやないか!!それより和葉。お前この子知っつとったんか?」

「うん！！だって同じ女優業してて蘭ちゃんは歌手もとるんやでー！！」

「ほあ。そらけつたいなやつちゃー！」

「話を進めるな！つてかお前たちココに泊まってく気かー！！」

「ええやろ？たまにわなあホテルやなくて工藤ん宅がええし。」

「うちは平次と一緒にないとあかんし・・・」

「しょうがねーな・・・じゃあ今日だけだー！！蘭もいるからな。」

「おつしゃー！！！！」

「平次・・・あほらし・・・」

「じゃああたし和葉ちゃんといっしょでいい？」

「ああ。じゃあ蘭と和葉ちゃんは2階のゲストルームで寝てくれ。服部、お前は勝手に

ねてろ。」

「なんやねん！！それひどすぎとちゃうかー！！」

「アポなしで来たお前が悪い。」

「そんなー（涙）」

そして蘭と和葉が夕食をつくりみんなで食べた後、蘭と和葉は2階のゲストルームへ、

服部は1階のゲストルームへ、そして新一は自分の部屋にいき静かに眠りについたのだった。

新一宅、なんで？（後書き）

華「関西弁、変じゃないかな？」

蘭「大丈夫だとおもうよ♪」

華「蘭ちゃんー!! やさしすぎ(涙)」

新「なんか今日涙もろいな。」

華「しのせいだい．．．（怒）」

新「今度は怒った。」

華「なんだって――！！！」

新「ひえー」

蘭「あらら、まあいつか。じゃあ和葉ちゃんいる？」

和「いるよ」♪

蘭「じゃあ今回は二人で!!」

和蘭「眞実はいつもひとつ！」

新「ひえー！！」

華「まてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

和「あらら（汗）」

朝――仕事にGO!――(前書き)

長くなりました(汗)
感想等まってまーす♪

朝――仕事にGO！――

朝、一番早く起きたのは新一だった。

「うへえ・・・まだ、7：00じゃねーか・・・寝よ寝よ・・・」

そして10秒後・・・

「Z Z Z Z Z Z Z・・・」

寝てしまった。

8：00――

「んっ。あらもう8：00じゃない。起きないと仕事に遅刻する。」

「？んっ。蘭ちゃんもう起きたん？ってもう8：00やないの！遅刻する！！！」

「仕事何時から？」

「8：45に集合や！急がんと・・・怒られてまう！！！」

ピンポン

「なんや！こんなときに・・・ってメールきとるやん！！！」

.....

迎え 7:00

和葉ちゃん。

仕事遅れるといけないから

8:15に迎えに行くね♪

ちゃんと準備しておいてね！

- - - - -

「よかった・・・！！つてもう15分！行つてきまーす！！」

ガチャッ パタン

「そろそろアタシも準備しよつと。」

♪♪♪

「あつ園子からだ！なんだろう?」

- - - - -

今日の仕事

- - - - -

今日の仕事、歌手のほうだよ！

8:30に迎えに行くから、ちゃ

んと準備しときなさいよ！！

♪スケジュール♪

8:50スタジオ入り

「明日の空」を歌う。（ロケ）

10:00隣のスタジオで・

「○○○の独占インタビュー」

←（続く）

- - - - -

「そろそろ時間だ!! 行ってこよう!」

「蘭そついや仕事だったな、行くのか?」

「うん、新一ご飯は?」

「ああ置いてくれたの猛スピードで食べた。」

「じゃあ行こつ!!」

「ああ」

ガチャ

「蘭ー♪ 新一君もおはよう!」

「おう、はよう」

「よーし今日もがんばるぞー!!」

朝――仕事にGO!――（後書き）

華「ながくなっちゃった・・・」

新「いいんじゃないかねーか？書いてくれればうれしいぜ？」

華「ありがとう（涙）」

新「おう!!」

蘭「あたし、仕事大変だ・・・がんばろう!!」

華「できるだけ仕事の部分短くするからそれまでがんばって!!」

蘭「うんっ!!」

新「じゃあいつもの決めゼリフ!!」

新蘭華「真実はいつもひとつ!!」

明日の空 忙しい休日（前書き）

歌詞は自分で考えました（！！）

ちなみに載せてるのは1番だけです。

明日の空 忙しい休日

「じゃあいきまーす本番5秒前！4・3・2・1どうぞ！」

ナレーター

「それでは 蘭 で『明日の空』です。どうぞ。」

蘭が歌い始め、観客が感動し始める・・・

いつも 見ていた 『景色』

それが続くと思ってた

キミに出会ってから

毎日見ていた景色が変わってた

それでも 日々は過ぎてゆく

だから毎日楽しく生きていこう

明日 私ができるなら

キミにこの『気持ち』伝えましょう

いつか別れも時がきても

それまで『愛』してくれませんか

『明日の空』はきれいですか？

「ありがとうございます」

番組が終わり・・・

「すごいな。蘭、そんなに歌上手だとは思わなかったぜ！」
「ほんと！？ありがとう」

「じゃあ次の仕事行きましょうか？」

そして忙しい一日が終わったのだ。

明日の空 忙しい休日（後書き）

華「この歌詞、なんとなく思いついたんだよ」

新「すごいな・・・」

華「だって将来音楽関係の仕事志望だもん！」

蘭「作詞作曲？」

華「それ以外にピアニストもやってみたい。」

新「もつとすごい」

蘭「じゃああたしが今回は言うね！いつもの決めゼリフ！！」

新蘭華「真実はいつもひとつ！」

仕事のない休日　く記憶がく（前書き）

ここで、なんと新一&蘭が記憶をなくすのではなく
園子と志保（2人！？）が記憶喪失になってしまいます・・・

「園子と志保が病院に搬送されたって・・・」

「やべえじゃん！行こうぜ！！」

園子の記憶 志保の記憶（前書き）

病院で・・・

園子の記憶 志保の記憶

ガラッ

「園子!」

園子は静かにベットの上に座っていた。

「おい園子?」

園子は?という感じで・・・

「あの・・・誰ですか?」

と答えた・・・

そしてその横には、宮野志保がいた。

志保はベットに寝ていて上の空。

「志保?どうしたの?志保らしくないよ?」

「し・・・ほ?私の名前、しほっていつの?」

「エ-----っ!」

そのあと医者に会い聞いたところによると・・・

園子と志保はたまたま近くにショッピングモールが出来たということ

買い物に行く途中、信号を無視した車にはねられ、ココに搬送されてきたのだという。

そしてその衝撃で記憶をなくしてしまったのではないかということも・・・

「そんな・・・」

「とりあえず学校などは行ってもかまいませんので、行って思い出すかもしれませんし。」

「「わかりました」「」

ふたりは園子と志保の前で笑顔を見せることしか出来なかった。

園子の記憶 志保の記憶（後書き）

華「ひどいね・・・これ・・・」

新「てつきり俺が蘭の記憶がなくなるのかと思ったんだけど。」

蘭「あたしも。」

華「ほんとは快斗と青子にしようかなあとおもったんだけど・・・」

蘭「だけど？」

華「こつちにしたらどうなるかなあとおもって。」

新「まるくおさめてくれよ？」

華「うん。わかってる。」

新「それではいつもの決めゼリフ!!」

新蘭華「真実はいつもひとつ!!」

次の日の学校（前書き）

前話の次の日の学校です。

次の日の学校

「おはようございます。蘭さん、工藤君。」

「おはよう！志保。」

「よあ。」

「ごめんなさーい！まった？蘭、工藤君。」

「いやまってねーぞ。」

「だいじょうぶだよ！園子！」

志保の場合、前と呼び方は変わっていないが、園子の場合蘭に「蘭っていつてくれない？」と

言われたため蘭のことは蘭、ただしまだ新一のことを新一君と言うのは気が引けるので

工藤君といっている。

学校 -

「おはよう！」

「おはよう。蘭相変わらず元気ね。」

「もっちゃん！」

「園子もおはよう。」

「おはよう玲華。」

園子の場合、友達の名前は覚えていた。

「おはよう。志保、なんか疲れてる？」

「すこしね・・・美鈴あなたこそやつれてるわよ？」

「うそっ！？どうしょ。今日デートなのにい」

志保のほうも覚えてるみたい。

もしかして仲が良かったり親しかったりする人の名前忘れてるのかな？

志保、博士のこと忘れてたし、園子も専属執事さんのこと覚えてなかったし。。。

昼休み ― ご飯 -

今日はいい天気だから久しぶりに屋上に来て見た。

「気持ちいいわね。ここいつも来てた気がする。」

「うん。きてたよ？志保。だってアタシココおぼえてる。」

「それより早く食べないと、お昼休み終わっちゃう！」

みんな大慌てでお弁当を食べたのだった。

授業中――

今の科目は英語。

新一は得意科目だから「~~~~~?」・・・」
ずーっとなんて答えてる・・・（かわいそう）

（園子、この科目・・・）

（得意だったでしょ？勉強は支障なしってところかな）

（やっぱりってことは記憶・・・）

（戻りつつあるかも）

（志保は？）

（私的には問題なさそう。もともと勉強得意だったみたいね。）

（うん。新一並みに頭良かった。）

（そうなんだ。ならだいじょうぶそうだな）

（記憶のほうは？）

（そっちはまだかかるかも・・・）

（わかった。）

「じゃあ今日はコレで終わりだ。」

「起立ー！。礼ー。着席。」

こんなやり取りをして蘭たちの授業は終わった。
そんな中、新一はへとへとで授業を終えた。

（なんで俺ばかりさせられるわけ？疲れた・・・）

次の日の学校（後書き）

華「どうでしょうか？」

新「俺頑張った。」

蘭「うん。がんばったね。」

華「あたし英語しゃべれるようになりたいな。」

新「慣れると簡単だぜ？」

華「でもフランス語のやりたいの。」

蘭「なんで？」

華「フランスの音楽学校に将来行きたいから。」

新「すごい。」

華「sonだけ音楽好きなの。」

蘭「小説書いててだいじょうぶ？」

華「歌詞作るのに役立ってるからだいじょうぶ！」

蘭「がんばってね！」

華「うんっ！！」

新「それではいつもの決めゼリフ！！」

新蘭華「真実はいつもひとつ！」

真さん登場！？　今日は晴れのデートの日」

今日は蘭と新一のデートの日。でもたまたまショッピングに来ていた、

園子と志保にあってしまった。

ピピピピピピっ……………

「？だれだろっ真さん…………？」

「園子覚えてないの！？」

「うん…だれ？」

「ちよつと貸せ！」

ピッ

「真さんですか？新一です。」

「工藤君？何でキミが？園子さんの携帯だよね？」

「はい。いまたまたあったこの前の事故で園子が真さんや大事な人の記憶をなくしてるみたいで」

「ええっ！？いま何処にいるんだい？」

「ショッピングモールですが…………」

「そんな近くに！？いまたまたま横のソートホテルにいるんだ。」

「そうですか！じゃあきていただけますか？」

「わかりました！いまからいく。待っていてくれ、正面にある像の前でね」

「はい。」

数分後・・・

「ハアハア・・・ごめん工藤君。」

「いえっ・・・園子、真さんだ。お前の言うならば彼氏だ。」

「あっあたしの！？」

「やっぱり驚くわよね・・・あたしは覚えているわ。」

「よかった。志保は覚えてるみたい。ってことはやっぱり・・・」

「ああ二人は大事な人の記憶をなくしてる。」

「そうなのかい！？じゃあ園子さん・・・」

「ごめんなさい。でも大丈夫。あなたの事は少しずつ思い出すから。それまで待ってもらえる？」

「もちろんです!」

() やっぱりこうでなくっちゃ! (ちゃん () ()

「じゃあ私は帰ってもいいかしら? 博士に頼まれてる事があって
いかないと間に合わないの。」

「あっそうだったね。志保じゃあ明日ね!」

「ええ。蘭、工藤君、これ渡すの忘れるところだったわ。どうぞ。」

それは、蘭には雪の結晶のネックレス。そして新一には、これは
言わないでおこう (新一は赤くなっ た)

「ありがとう! 志保!」

「いいのよ! じゃああしたね」

そうして、園子は真とそのままデートへ。新一と蘭もデートに向
かったのである。

真さん登場!？ 今日はずれの日 (後書き)

季節は冬ですよ

・園子と真の1日・（前書き）

ちなみに蘭と新一は彼氏彼女の関係です。（いきなりですが・・・）
志保は・・・後で彼氏をだそうかなあ・・・オリキャラですね
多分・・・（汗）

よろしく願います
三

・園子と真の1日・

「園子さん。そろそろ時間ですよ いきましょう。」

今日は真と園子で映画を見に行く事になっている。

まあ、園子はお金持ちですから園子の家のホームシアターで見ればいいのだが

外に見に行けるのも大学生を終わるまで。

大学を卒業すれば、父から仕事を授からなければならぬ。

（姉が社長だから多分副社長という事らしい。）

だからこうして見に行くのだ。

「ごめん×2（汗）」

今日のファンタジー。真さんが見れるものにした。

「いやあああああああああああああああああ！！」

今回の怖いシーンが多く園子や他の客も悲鳴を上げたのであった。

志保の記憶が戻った！？（前書き）

そのまんまですね（笑）

あとがきでゲストさん（お仲間さん）
いれちゃいます

あとオリキャラで志保の彼氏作りました！

唐峰 海矢（とうみね かいや）

志保同様、天才。ちなみに

海矢は数学の天才である。志保たちとおなじクラス。

志保の記憶が戻った!?

学校の登校中。

今日は雲ひとつない綺麗な青空^{そら}

皆が寒そうに学校に行くなか、志保も彼氏こと、唐峰海矢とともに学校に向かっているのだった。

「おはよう。海矢。」

「おはよう、志保。科学の宿題やってねーんだ。見してくれ。」

「あらっ。海矢にしては珍しい。」

「悪かったな。珍しくて(怒)」

「冗談よ いきましょう。遅刻しちゃう!」

「おお!」

とまあこんな感じで惚気をかましているがまだましなほうだ(汗)

学校(教室)

相変わらず新一は寝ている。(呆)

「おはよう、工藤君また眠ってるのね(呆)」

「おはよう、志保。そうなのよ。昨日夜の10時に電話が来て調査に行って

帰ってきたの。朝の3時だったの。」

「そうなの、呆れるわね。」

「あたしも聞いた時は呆れた。」

志保と園子が呆れ顔で新一を見る。

ガラッ

「おーい！席につけー。転校生来てるぞお！」

「「「「「まじっ!?!」「」「」「」」

この後、蘭と新一（寝ているが）は驚きを隠せなくなる。

志保の記憶が戻った！？（後書き）

華「今日はゲスト来てるよお」

蘭＆新「誰？」

亜「初めまして。華逗葉の友達です」

蘭「やったー初めまして♪」

新（蘭、テンション高くなった。）

亜「初めまして♪」

華「今回はこの4人で決めゼリフ言うよ」

蘭＆新「Ok！」

華「それではいつもの決めゼリフ！」

蘭新亜（華逗葉がゆっちゃった。）

新蘭華亜「真実はいつもひとつ！」

うっそー！？（前書き）

今回志保の記憶が戻ります（転入生を見てですよ？）

転入生はこのお話の原作を読んでる人ならこっちもしつてると・・・

「転入生入れ。」

そこにいたのは。

「ども♪黒羽快斗です 特技はマジック!よろしく!」

ポンッ

手から鳩が飛び出る。

「初めまして 中森青子です♪よろしくね!」

そう、これまた新一と蘭に並ぶ幼馴染カップルである黒羽快斗と中森青子だった。

そして、その瞬間。

ピキッ「あっ・・・」

「志保？どうした？頭痛か？」

ズキッズキズキ・・・「うっ・・・」

「はっ！」

そう、その瞬間。志保の記憶があっさりよみがえったのである。

「ごめんなさい、海矢。記憶が戻ったわ。」

「まじっ！？ってことは俺の事も・・・」

「ええ。私から初めて好きになった人。」

「そっそこまで！よかった・・・志保、思い出してくれてありがとう。」

「いいえ。思い出せてよかったわ。じゃないと大事な人のこと一生忘れたままだったもの。」

「そうだな。」

うつそー！ー！？（後書き）

華「海矢君よろしく やさしい志保の彼氏さん。」

海「ありがとう／＼／照れるな。」

華「でも志保が初めて好きになった彼氏さんっていいね」

海「自分がそうしたんでしょ。」

新蘭「あのお。」

華「ごめん！新一、蘭。」

蘭「そろそろ、決めゼリフいっちゃう？」

華新海「いっちゃおー！」

新「じゃっ今回は海矢もいっしょにどうぞ？」

海「やりたい！」

新「それでは、いつもの決めゼリフ！！」

新蘭華海「真実はいつもひとつ！」

園子の記憶も・・・!?(前書き)

今回は園子ですね・・・

ちなみに杉港高校と藍空高校は架空の高校です。

ちなみに青子と蘭は呼び捨てしあっています。

園子の記憶も・・・!?

「青子。杉港いくんじゃなかったのか？」

「そんなこといってないじゃない！でも青子。てつきり快斗は藍空高校いくんだと・・・」

「俺もそんなこと言つてねーし。」

ただいま快斗と青子は、前の学校で俺たちは離れ離れになつても心は繋がつてんだから

離れねー的なことを言つときながら、おんなじ高校に来てしまひなんとなく損をした気分ひたつていた。

「あの・・・青子？」

「あつ蘭！久しぶり&これから高校一緒だね♪」

（なんかわかんねーけど青子ちゃんグレードアップしてねーか？）

「久しぶりだな。快斗。」

「おお！新一。久しぶり！」

（あらっ？黒羽君は変わってない。）

「あっそうだ。新一これやるよ。」

そして快斗が渡したのは5枚のチケット。

「何だコレ？」

「俺のプロデビューコンサートのチケット。4枚あっから服部たちと鈴木でもよんでくれよ」

「蘭、くるか？」

「あたしはいきたいな♪和葉にも言ってくるね！」

そうして、蘭はケータイを持って廊下に行ってしまった。

「そーいや青子ちゃんはよばねーのか？」

「青子はアシスタントになる事が決まってるだ。」

「ほお・・・そーいや園子はどうする？」

「あたしはどうしよっかな・・・真さんが帰ってくるのはたしか・

・
うんっ！大丈夫！いくわ！」

「じゃあみんなでいくぜ。」

「じゃあコンサートで会おう。」

そうして一日とっても忙しい一日を過ごしたのだった。

シヨ―での衣裳は『月下の奇術師』（前書き）

まあ・・・そのとおりですね（笑）

『月下の奇術師怪盗キッド』

だった。

これまたキッドも数ヶ月前まで華麗に宝石を盗む怪盗キッドは人気があったため、

客はもうキャーキャーうるさいのなんの・・・。

しかし、快斗のほととの姿を知っている5人は静かにショーの始まるのを待っている。

ショーが終わり、人々はそれぞれの居場所の帰っていった。

そして、新一ら5人は快斗と青子の（男子は快斗の、女子は青子の）楽屋へ向かったのだった。

快斗の楽屋 ― 重大発表 ―

「よっ快斗。ショーうまく行ってよかったな。」

「おおよかったでえ。」

「そういつときながら種わかってんだろーが。」

「「大当たり」」

こんな感じで相変わらず頭のいい3人はショーの話からあっさり事件の

話に変わってしまった。

「それで……だったわけだ。」

「「ほお。」」

そのとき、快斗は！っと何かを思い出して。

「そうだった。お前らに重大発表だ。」

「なんだ？改まって。」

「そやそや。」

「まあきけ。」

そして周りが静まりかえる。

「俺、青子と結婚する事になった。」

青子の楽屋 ― 重大発表 ―

「青子お」

「青子入るでえ」

「二人とも！アタシどうだった？」

「「完璧（笑）」」

こんな感じでいつもどおりの青子たち。

そしてファッションの話をしていると青子が重大発表があると切り出した。

「重大発表？」

「なんなん？それ。」

「あたしたち、高3じゃない？だからね・・・その・・・」

恥ずかしそうに青子はいう。

「もぉ！ちゃんとゆーてや！」

「和葉と蘭の時の参考に（笑）」

二人はまっかつか。

「「ありがとう。」」

「これ招待状。きてね」

「「もちろん!!」」

あのさ・・・

今日は快斗のショーの次の日。

蘭と新一は平次と和葉が帰ったため静かな休日をおすごしていた。

そのとき、新一が話を切り出した。

「あのさ・・・蘭。」

「なーに？新一。」

新一はすぐく言おうか言うまいか迷っている様子。

「新一、だからなーに？？」

新一は決心したようにいった。

「俺たちも結婚しなーか？」

「へっ!？」

「ちよっつとまって?それってもしかして・・・」

「プロポーズ」

「ほんとに?」

「ああ」

「ほんとに　ほんとに?」

「ああ」

「ほんとに　ほんとに　ほんとに?」

「だからそうだって・・・」

そう、蘭はびっくり!。

そして、

「もうちょっとしないでいいこととかないのかしらねえ?」

そう。求婚するくらいならいくら新一でも『婚約指輪』ぐらい・

・

「もちろん、あるぜ?手だしてみろ。」

「うん。」

そして手にはめられたのは、

ダイヤモンドのついた『婚約指輪』だった。

その日の夜――平次と和葉――（前書き）

流星群の名前は架空です。

その日の夜 ― 平次と和葉 ―

「平次。久しぶりに来るね！この岬。」

「ここは愛ノケ丘岬。人気の告白スポット。」

「ここで和葉は平次に告白され、付き合う事になった思い出の場所。」

「ああ。その・・・それでな・・・」

「なに？平次。」

「そろそろ、俺ら結婚せーへんか？」

「ほんとに・・・？」

「ああ。」

「そう、そして平次は、今回結婚も申し込みをするためここにきたのだった。」

「アタシでええん？」

「じゃなかったらいわへんやろ！」

「そやな・・・」

そして。

キラッ

「いまの！」

「流れ星やな。きょうやったっけ？そや！今日はリング流星群や！」

皆はてつきり平次は知っていただろうと思っているだろうが、じつは平次は日にちは1週間前まで覚えていたのだが忙しくて忘れていたため、

まったく持つて知らなかった。

「リング流星群？」

「ああ。たまにな？流れ星がクルッと一回りするときがあるんや。それが指輪みたいやからリング流星群っちゅう名前がついたらしいで？」

「指輪？へえ。なんかロマンチックやね。でも取れへんのが悔しい。届きそうなんに。」

「俺がとつたるか？」

「んなんいったって無理やろー。」

平次は手を上に突き出し何かをギュツと拳に握った。

「ほれ。やるわ。」

「わぁ・・・かわいい！ありがとお平次！でもこれ。」

そう、鈍感な和葉でもきずいた。

それは

「これ、エンゲージリング婚約指輪やないの。」

そして二人の影は重なったのだった。

報告 — 新一&蘭 — (前書き)

平次たちと新一たちの告白の次の日です。

報告 — 新一 & 蘭 —

唐突に新一は平次たち（正確には平次に、蘭が別室で和葉に話している）に

いった。

「俺、蘭と結婚すつから。」

「やっとかぁ・・・俺らもお前らも長かったなコレまで。」

「つてーことはおめーもか？」

「ああ。昨日、俺らの思い出の場所だな。」

「よかったじゃねーか。これからは普通に暮らせそつにねーがな。」

「当たり前や。結婚しました！なんてゆーたら俺ら学校いけへんし
大学もいけへんくなるで？」

「つてことでこの件は・・・」

「俺らの秘密やな（だな）」

「まあ俺たちと蘭たちのっただけだな。」

「ああ。」

これから波乱の大学生活が始まりそうだが、それはまた他のお話。

報告 ― 新一 & 蘭 ― (後書き)

勝手に完結しちゃいました！

読者のみなさま！ごらんいただきありがとうございます！

こちらの小説はシリーズにするつもりですが・・・

いま、連載をコレをいれて3つ抱えてるので、

もうひとつの連載（多分恋人と友達をたしてそれを2でわると）が
終わったらしようかな・・・

でもすぐに始めるかも（笑）

これから華逗葉を応援よろしくお願いします！

そして短編等のリクエストお待ちしてます

ちなみに次の話はおまけですよ？

華逗葉

おまけ——じつは狙われていた工藤新一！

「あひま」

Handwriting practice lines with dashed midlines and a solid baseline. The page is numbered 10 in the top right corner.

!

ただいま、工藤新一を実況中です。（笑）

ちなみに俺は快斗だぜ？

じつはただいま題名のとおり工藤新一は狙われて必死に逃げてお
ります！

だれにかつて？

だれ（・・）じゃねーよ、なに（・・）だよ。

そつ、新一はただいまたくさんの動物たちに追い掛け回され
彼女の蘭ちゃんはその面白そーに微笑んでおります（笑）

なんで動物に追われてるかって？

それは・・・

博士が発明したその名も『動物ふれあいウォッチ』！！（ジャジヤーーーーン！！）

「ぎゃー」

「！！」

おっと失礼。

新一がまた叫んどります（笑）

『動物ふれあいウォッチ』動物の近くにいると動物の神経が刺激されて

温厚になってふれあいが楽しくなるってゆーやつなんだけど
これまた大失敗（笑）新一を好きになっちゃって（目がハートになつてんの笑）

結果追い掛け回されてるわけ。

「ぎゃー」

「！！」

まただね。(汗)

これが効力切れるのに20分ほどかんだよなあ・・・
いま何分すぎたかって？

えつとなあ・・・やっと5分(汗)

この先長そうだ・・・

「蘭ちゃん、そろそろ新一助けてやってよ。」

「そうね・・・なんか私まで可愛そうに見えてきた、行ってくる
ね。」

「おお。」

タッタッタ・・・

行った行った。

ラブラブだわー、新一と蘭ちゃん。

俺もおんなじくらい青子とラブラブなんだけどね(笑)

「青子お。コーヒーとって。」

「はい。どうぞ。そうだ、あたしうるさいから向こうで和葉と話してくるね?」

「Ok! あいつらは俺が見とく(笑)」

「出来ればビデオ撮っというて。」

「もうあたしが撮ってるわよん(笑)」

「「ナイス! 園子!」」

「それほども〜」

あらあら(汗) 蘭ちゃんまで追いかけてるよ?
でもあの二人・・・逃げてるのに手は繋いだままなんだなあ・・・

END

園子と真さんの甘々生活（前書き）

真さん視点です。

途中第三者視点になります。

園子と真さんの甘々生活

「ねえねえ・・・真さん。真さんってあたしのこと、好き？」

「ほへっ！？ゲホゲホッ・・・」

「ああ。ごめんなさい真さん。」

園子さんいきなりどうしたんでしょう？

ゲホッ・・・まだむせててゲホッ・・・うまく話せませんが。

「でっ。どうなの？」

「いきなりどうされたんですか？」園子さん。」

「えっと・・・それは・・・（あんたらが悪いのよ！新一君、蘭！）」

「何か言いましたか？」

「う、うつん！それでどうなの！-！」

「えっと・・・ですね・・・」

園子の愚痴の相手、新一と蘭に何を言われたかという・・・

それは、今日の最後の授業が終わってすぐの事。

「ねえねえ！今日真さん帰ってくるんでしょ？」

「うん。そうだけど？」

「ならさあ・・・真さんに告白してもらいなよ！」

「はあ！！なんでっ！！・・・」

「だっていつつも園子の方からしか言っていないでしょ？」

だからたまには真さんに言ってもらったらどうかnaあって思っ
てっ」

「なにそれ！つかそんな・・・」

「ゆえばいーじゃねーか。お前はつかだと真さんといつまでも・・・」

「・」

「そうよ！園子！ちゃんと言ってもらわなきゃ！」

「わかったわよ。聞けばいいんでしょ！聞けば！」

「そうそうその意気よ！園子！」

つてな感じだ。

そして今に至る。

「で!ど^うなのよお!」

「そうですねえ・・・」

「あたしは、真さん好きよ?」

「僕は、好きじゃないですね・・・」

「えっ!?!」

そんな・・・ばかな・・・

「僕は。園子さんを愛してる、かな?」

「真さん。。。うれしい」

園子と真さんの影が重なったという事は言っまでもないだろう。

FIN

快斗と青子の最短仲直り（前書き）

題名のとおりですね（笑）

短いですが、お付き合いお願いしますね

青子の友達の恵子視点です。

快斗と青子の最短仲直り

「なによーーーーー！！このバ快斗かいと！！」

「あんだとおおおおおお！！も一回行って見るよアホ子！！」

ただいま快斗と青子は壮大なる（いつもだけどね笑）喧嘩の真っ最中。

あたし的にはどうでもいいから早くしてくんないかなあ、今日用事あるんですけど・・・って感じ。

江湖田高校にいつもの怒鳴り声が聞こえてる。

「あんたたちさあ・・・早くしてくんない？あたし忙しいのよ？」

「「うつせー！！黙ってる！（うるさい！恵子は黙ってて！）」

」

こりゃ終わりそうにないや・・・

「青子、あたし先帰るね。」

「わかった！だから！！」

そろそろあたしみたいなお邪魔虫は撤退いたしますよ。

ほんと。いつになったらこんな痴話喧嘩なくなるのかしら。

あたしは用事が終わり家に帰る途中。

青子と黒羽君にあった。

その二人はすっごく仲良くおしゃべりしてて、

次の日に他の友達に聞いたんだけど、

あたしが帰った後、1分で喧嘩が収まったんだって。

あれ？までよ・・・

黒羽君と青子が仲直りする最短記録って5分だったよなあ・・・

ありやま。

最短記録更新してんじゃん(笑)

快斗と青子の最短仲直り（後書き）

これでおまけもおわってお話はすべて終わりです（涙）

でも今度は大学生活をいつか（えっw書く予定です。（ってか書きます！）

それまで他のお話でお付き合いくださいね

2011・11・1

華逗葉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3256x/>

記憶 —あの木の下で—

2011年11月16日18時42分発行